

総合型選抜(総合評価型) サンプル問題

経営学部

(試験問題：90 分)

・サンプル問題として 2025 年度 AO 入試または公募制推薦入試の過去問題を使用している場合があります。なお、解答・解説は公開していません。

2026年度 神奈川大学 総合型選抜（総合評価型）（サンプル問題）

【小論文】

経営学部 国際経営学科

【試験時間 90分】

つぎの文章を読んで、下記の設問に答えなさい。

AIが自動化してゆく未来 人にしかできない選択とは

1969年6月28日未明、機動隊約300人が出動する中、新宿郵便局に郵便番号自動読みとり区分機が搬入された。機動隊は、強盗を警戒していたのではない。搬入を妨害する労働組合員に対抗するための出動だった。今からすると、郵便番号を人間が読み取り、手紙を手作業で分類するのは労力の無駄でしかない。だが、機械による自動化（オートメーション）は、ブルーカラー労働者にとって、職を奪う脅威であったのだ。

そして、目覚ましい発展を遂げる人工知能（AI）の登場で、ついにホワイトカラーの職も奪われる時が来たようだ。AIは、資料を読んで要約レポートを書くような業務だけでなく、写真と見分けがつかない精緻な画像を注文に基づいて自動生成したり、コンピュータプログラムはもちろん詩を書いたりすることさえ可能になってきた。その進歩の様はSF的すらある。ホワイトカラー労働者は連帯して、AIの普及に歯止めをかけるべきなのだろうか。

そもそも、すべての仕事がロボットなどの機械やAIで自動化されれば、私たちは労働から解放された桃源郷にいるはずだ。しかし、生産物や富が「必要に応じて分配」される理想社会は到来しないだろう。自動化が進んでも、生産物や富の大半は各人の貢献に応じ、労働市場を通じて分配されるはずだ。すると、自動化されてしまう業務に従事する人は、貢献が小さいので分配も十分に受けられない。自動化の進展は、必然的に所得格差をさらに拡大する。

技術革新から生ずる賃金格差は、需要と供給の両面から次のように考えられる。生産に必要な労働には2種類あり、AIなどで自動化されてしまう定型業務と、自動化できない創造的業務があるとしよう。この二つの職種の賃金格差は、それぞれの重要性和希少性に依存する。AIなどの技術革新によって、定型業務の相対的重要性は下がり、その労働需要は減少する。結果、余剰人員が発生し、賃金格差は拡大する。

一方で、拡大した賃金格差に労働者も反応する。中長期的に労働供給が変化し、創造的業務を担える人が増える。希少だった人材の供給が増えるので、創造的業務の賃金が抑えられ、格差は抑制される。

新しい人材層を生み出すのが教育である。例えば、アメリカでは20世紀の間に自動化が大きく進んだが、同時に教育水準が高まり、労働者が担える業務の質も変化した。20世紀中ごろまで、アメリカは圧倒的な教育先進国であったのだ。1955年時点で、高校などへの進学率はヨーロッパ諸国でおおよそ10～30%であったのに対し、アメリカではすでに約80%である。

ハーバード大学のゴールドフィン教授とカツ教授の研究では、進学率の大幅な上昇が起きた20世紀前半、賃金格差は縮小したとされる。教育水準向上のほうが、自動化よりも大きく賃金に影響したからだ。20世紀後半には知識産業の比重が高まり、賃金格差は広がり始めたが、この時は大学進学率が伸びたので格差拡大に一定の歯止めがかかった。職業訓練校ではなく、高校や大学で学ぶことで、変化の激しい時代を柔軟に生き抜く人材が育成された面もある。

ただ、アメリカでは大学進学率の伸びが1980年ごろに鈍化し、賃金格差が急拡大した。もし、80年代以降も大学進学率がそれまでと同様に伸び続けていたら、格差は縮小に転じたはずだという。

技術革新に後れをとらぬように、教育を拡充し続けることが、次世代を育成する正攻法なのだろう。

だが、いま役立つスキルはすぐに役立たずになる。技術革新のスピードが速いので、スキルの陳腐化も加速しているからだ。かつて、文書の清書に使われた和文タイプライターなるものがあり、技能検定試験も行われていた。当然、ワープロの登場により廃れたスキルだ。そして、そのワープロでさえ、今は製造されていない。だが、様々な状況で、なにを文書に残すべきかを判断する思考力は、使う道具が変わっても活きる。こうした思考力を育成する教育をすべきであって、和文タイプライター技能のようなものを教育と位置付けるのは、失敗を招くだけだ。

2026年度 神奈川大学 総合型選抜（総合評価型）（サンプル問題）

【小論文】

経営学部 国際経営学科

【試験時間 90 分】

A I には不可能で、私たちにしかできないことは何か。それは「責任を取る」ことかもしれない。これは、失敗や不祥事について謝罪することではない。結果を自分ごととして引き受けることだ。その意味で、責任を取れるのは、不確実性があるときに、リスクをとって自発的に意思決定した人だけだ。

経済実験で、人間の代わりにコンピューターに結果を選択させることがある。すると、人間と同じ結果を選択しても、周りの人々の反応は異なる。責任のあり方が、意思決定の背後にあるはずの意図に深く関係するからだ。同様に、A I に選択はできても、意図をもって選択する役は、人間にしかできない。

責任をもって意思決定するには、強い自己決定力と責任感の基盤が必要だ。それは、命令や「空気」に従う画一的な集団主義のなかでは培われない。未来を担う意思の強い個人を育てるためにも、急いで変えるべきことはまだたくさんある。

（竹内幹 「A I が自動化してゆく未来 人にしかできない選択とは」 朝日新聞 2023 年 5 月 6 日 朝刊 9 ページ）

朝日新聞社に無断で転載することを禁じる。承諾番号（24-3139）

- 問1. 文章の内容を参考にして、ロボットや AI の進化により所得格差が拡大する理由と、所得格差を縮小させるための施策を 400 字以内で説明しなさい。
- 問2. ロボットや AI の進化により労働や職業のあり方が大きく変化しつつある。この変化に対して、人間はどのように適応すべきか、具体的な職業や職種を例にあげて、あなたの考えを 600 字以内で述べなさい。